

エッセイ

プロスポーツ界における「黄金世代」と「谷間の世代」

——サッカーを例に

鍋田 郁郎

(スポーツ誌編集者)

はじめに

日本のプロスポーツ界の世代管理について、ここではサッカーを例に考えてみたい。ただし、まず前提として、いったんプロスポーツの世界に入れば、そこでものを言うのは第一に実力であり、年齢は無関係だということは押さえておくべきだろう。もしまったく同じ実力と人気（集客力）を持つ20歳の選手と30歳の選手がいれば、試合に使われるのはむしろ20歳の選手である可能性が高い。試合に出ることによって得られる今後の“伸びしろ”が期待できるからだ。ここでとりあげるのは、正確に言えば「プロになる直前までの世代管理」ということになる。

サッカーをとりあげたのは主として二つの理由による。日本では多くのスポーツが、その育成段階を学校教育に頼っているばかりか、他に選択肢がない場合も多い。競技によって、あるいは学校によっては事実上プロ養成機関に近いところもないわけではないが、建前上、スポーツは教育の一環であり、実際、プロ志向などゼロの生徒が大半だろう。だがサッカーにはもうひとつ別の経路ができつつあり、しかもこちらは最初からプロになることを意識したものになっている。プロの前段階について議論するには、適しているのではないかと思ったからだ。そしてもうひとつの理由は、なぜかサッカー報道には「〇〇世代」というフレーズがよく出てくるからである。

なぜ他のスポーツに比べてもサッカーにおける年代別のチームの存在が目立つのかというと、ひ

とつの理由は世代別に世界大会があり、国際的にそれなりの権威を築き、実績を残しているからだ。FIFA（国際サッカー連盟）は、4年に1回のワールドカップのほか、U-20（20歳以下）ワールドカップ、U-17ワールドカップを、それぞれ2年に1回、開催している。4年に1回では、たとえばU-17ワールドカップに、開催時点で14歳の選手は事実上、出場のチャンスがなくなるためであろう。FIFA主催ではないが、オリンピックの男子サッカーも、出場できるのは23歳以下（大会によってオーバーエイジ枠などの例外あり）なので、ある意味では年代別大会のひとつに数えることができる。予選を含めてこうした年代別大会に出場する代表チームには、当然その世代のトップクラスの選手が集まることになる。ファンはそこで将来有望な選手の品定めをし、次代のフル代表の姿を思い浮かべる。メディアの注目度も高い。

またこうした大会があれば、横（他の国）の比較とともに、縦（前の世代）の比較もしやすい。現在まで、日本がこうした国際大会で最も優れた成績を残したのは1999年、ナイジェリアで行われたワールドユース（U-20ワールドカップの旧称）で、準優勝に輝いた。このときのメンバーが属する世代は“黄金世代”などと呼ばれている。日本はその後この大会に出場しているが、なかなかグループリーグを突破できず、“谷間の世代”などと言われてしまうこともあった。そして谷間があればまた山もあるというわけか、今年6～7月、カナダで行われたU-20ワールドカップでは、日本はグループリーグを1位で通過。決勝トーナメン

トではチェコに敗れたものの、ゴール後に派手なパフォーマンスを披露するなど、これまでにない活発なスタイルを見せたことにより、“やんちゃ世代”などと名づけたメディアもあった。

プロ選手への道

そもそも現在、日本のサッカー選手はどういう経路を辿ってプロにたどり着くのか。

少年時代に遊びでサッカーを始めて好きになり、中学に入ると学校の部活でサッカー部に所属。ここで頭角を現して強豪校と呼ばれる高校に進学。全国大会にも出場して活躍が認められ、やがてプロのスカウトがやってくる——そんなイメージを抱いている方がいるかもしれない。現在でもそういう例がないわけではないが、ここ十数年で実態はかなり様変わりしている。ひと言でいえば多様化しているのだ。

現在、第一線で活躍しているプロの中には、幼稚園時代にサッカーを始めたという者も多い。クラブとしてサッカーに親しめるようにした幼稚園が増えてきた。日本幼稚園サッカー連盟という統括組織があり、地域ごとの大会も開かれている。それ以外に、地域のクラブチームが幼稚園・保育園の園児を対象にサッカー教室を開いている例もある。

小学生になると選択肢が増えてくる。学校単位のクラブ・少年団があり、地域のクラブチームがあり、さらにJリーグのクラブの下部組織もある。Jリーグの各クラブの下部組織や世代別養成についてはあらためて後述するが、小学生世代を対象にサッカースクールを開くなどしている。さらに小学校高学年になるとジュニアやU-12（名称は各クラブによって異なる。以下同様）というチームを組織し、セレクション（将来性のある選手の選抜）を行うところもある。小学校にはサッカーができるだけの環境が整ってないところも多く、また地域のクラブの活動状況も、地域間格差は大きい。そのような事情もあって、いわゆる「サッカーがうまい子」は、通える範囲であればJリーグのクラブを目指す傾向が強いようだ。ちなみに小学校高学年の年代は、サッカーに限らずスポーツの世界では「ゴールデン・エイジ」と呼ばれる。まだ

十分に筋肉がついていないため運動能力は低い、他の年代に比べて驚くほど早く技術を吸収できるため、技術の習得に最も適した時期であるとされる。つまりこの時期に何をしたが、選手としてのその後の成長に大きく影響するのだ。

プロを目指すのか、趣味としてサッカーを続けるのか。そんな葛藤が最初に生まれるのは中学生時代かもしれない。というより、抜きん出た才能があれば、この年代で、事実上プロレベルでデビューすることも可能だ。現在イタリアで活躍中の森本貴幸選手は、東京ヴェルディの一員として、中学生でJリーグの試合に出場している。サッカーではこの年代をジュニアユースと呼ぶ。この時期、選手は中学校のサッカー部や地域のクラブチーム、Jリーグのクラブのジュニアユースチームに所属する。Jリーグのクラブについていうと、小学生には広く門を開き、スクール等を通じてサッカーに親しんでもらうことを第一義としているのに対し、U-15では選抜を行い、より高いレベル、ひいてはプロを目指す選手の育成という目的が鮮明になってくる。志望者数百人のうち、実際に入れるのは十数人という狭き門だ。森本選手がJリーグの試合に出場できたのも、東京ヴェルディ・ジュニアユースに所属していたからだ。また地域のクラブの中にも、あくまでサッカーを楽しむための同好会的なクラブから、優秀な選手を輩出することで有名な伝統あるクラブ、全国大会で優勝を目指すような高校が下部組織としてつくったクラブまで、さまざまなものがある。

中学校のサッカー部についていうと、プロの育成という観点から見ると、残念ながら存在感は薄らいでいると言わざるを得ない。ご存知のように日本のスポーツは長年、学校教育と切っても切れない関係にあり、それ故の限界も以前から指摘されてきた。もちろん野球の甲子園に代表されるように、学校を単位としながら大きな成果をあげている競技もあり、一概に切り離せばいいというものではないだろう。ただあらためて関係者に聞くと、優秀な選手を育てる上で高校受験が大きな壁になっていることは間違いのないようだ。学校のクラブに所属する限り、中学3年のある時期に引退して受験勉強を始め、高校に入学したら入学した

で、また新しい環境でクラブ活動を始め、特に強豪校などは膨大な部員を抱えているため、最初のうちは競技に集中することはできない。それこそプロになれるかどうかの岐路ともいえる大切な年代で、1年近く競技を離れるのはとても合理的とは言えまい。最近、高校選手権などで中高一貫校の躍進が目立ったり、全国大会の常連といわれるような高校が、自前のクラブをつくって中学生を集めたりするのも、ひとつの理由はこのためである。

サッカー界独自の選手育成システム

もうひとつ、サッカーには特徴的な経路ができたので、それを紹介したい。

クラブや学校をベースにしながらも、それとは別に、日本にはサッカー協会が進める独自の選抜・育成システムがある。トレセン（トレーニングセンターの略）制度というのがそれで、将来トップレベルの選手になれる可能性がある選手を発掘し、年齢や所属を超えてハイレベルな環境と指導を与えるのが第一の役割、としている。1976年にスタートし、80年代に本格的な活動を開始。現在は男子がU-12、U-14、U-16、女子はU-12、U-15、U-18のカテゴリーを設け、地区トレセン、都道府県トレセン、ナショナルトレセンを定期的に開催している。ともすれば学校やクラブが、「強いチーム」を目指すのに対して、あくまでも個々の選手の育成が目的だ。ナショナルトレセンに選ばれるのは、ある意味でその世代のエリートであることを意味する。

さらにサッカー協会は、「世界基準の選手の育成」をより積極的に進めるため、2003年度より、男子の13/14歳を対象に、JFA エリートプログラムを開始した。集中合宿や海外遠征を年間を通じて数回行い、かつサッカー以外のプログラムを取り入れることで、選手としてだけでなく、人間としての成長を促すきっかけを提供したいとしている。このエリートプログラムの延長線上に生まれたのが、2006年に開校したJFA アカデミー福島だ。選手は寄宿生活をしながら、福島県内の公立校で中学・高校生活を送る一方、優秀な指導者と充実した環境のもと、サッカー活動を行って

いる。第1回は志願者455人の中からセレクションで17人が選ばれた。開校3年目となる来春も、中学1年生（現在小学校6年）の男子15人、女子6人を全国から募集している。まだ始まったばかりの試みだが、やがてここから、日本を代表する選手が輩出されることになるかもしれない。

もっともどの経路がプロへの近道なのかを簡単に決めつけることはできない。これは高校生段階になっても同じだ。今年8月、韓国で行われたU-17ワールドカップに出場したU-17日本代表メンバーのうち、3分の2はJリーグのクラブのユースチームに所属し、3分の1は高校のサッカー部に所属していた。

2007年シーズン開幕時に作成されたJ1の選手名鑑を見してみる。全18チームの所属プロ選手は合計568人。このうち、今季初めてプロ契約をした日本人選手は67人に上る。彼らの前所属チームを調べてみると、高校が18人、大学21人、Jリーグのクラブのユースチームに所属していた者は28人に上った。現段階では決定的な差があるとはまでは言えないが、クラブ出身者の割合は年々増えており、クラブ優勢の傾向は続きそうだ。

選手が中学や高校のサッカー部よりクラブを優先する理由として、一般的に言われているのは、プロのコーチの存在、芝生のグラウンドなど優れた環境、少数精鋭で練習できること、目先の勝利よりあくまで個人の育成を主目的にした方針、「飛び級」を含めて様々な意味でプロを身近に感じられること、などである。

転機は1993年、Jリーグの発足だった。ヨーロッパのサッカー先進国から「クラブ」というこれまで日本になかった概念を持ち込んだJリーグでは、スタート当初から、「参加団体は、トップチームのホームゲームを80%以上開催し、さらにファーム、2種（19歳未満）・3種（16歳未満）・4種（13歳未満）チームを含めた練習及び選手育成のための施設等があり、サッカー競技の普及活動を行える地域（都道府県・市町村）を持つものとする」と、加盟クラブに対して、下部組織のチームを持つことを義務づけた。サッカーの普及やサッカー界の将来を担う選手の育成は、リーグ発足の

目的として掲げられた。

理念先行でできた育成組織は現在、どのように運営されているのか。世代別管理の実態はどうなっているのか。今回、複数の現場コーチにもあらためて話を聞いてみた。

世代管理の実態

まず、現場の感覚で、本当に世代による優劣というものはあるのだろうか。

個別のクラブレベルでは、何らかの理由で「今年は良質な素材が隣接する他のクラブに流れた」などということが起こりうる。したがって自分のチームの優劣=世代の優劣とは言えない。ただユース年代になってくると、全国的に情報が集約され、それこそ「今年は豊作」と感じられるようになることがあるそうだ。この世代から選ばれたU-17日本代表レベルになると、世代の優劣というより、この段階で何を経験するかでその後の成長に影響するかもしれない。世界大会に出て、同世代のまったくプレイスタイルの異なる国の選手と真剣勝負をすることで得られる経験や自信は大きい。予選で敗退すれば、アジア以外の国と試合することはない。本大会に出場すれば、最低でもグループリーグの3試合を、仮に決勝まで進めば7試合を経験できる。プロの中でもさらに選りすぐりの、日本代表の候補になるような選手にとっては、それぞれの年代で経験するこのほんの数試合が、後々まで生きてくる。

次に聞いたのは、世代管理はどこまで有効なのか、という点だ。

たとえば小学校4年生のチームと小学校6年生のチームが対戦して、まともな試合になるとは思えない。だが高校3年生主体のチームに高校1年生が入っているのはあり得そうだ。体格や運動能力が急激に変わる時期である。しかも成長の度合いやスピードは個人によって異なる。そもそも世代別になっているように見えるのは、これらのことを勘案し、とりあえず学年単位で集団をつくっているからだ。ジュニアユースのコーチに聞くと、新中学1年生がチームに入ってきたとき、4月生まれの子と、翌年の3月生まれの子でも、体力には相当な開きがあるそうだ。ただサッカーの場合、

身体能力が異なる者どうしが一緒にプレイするのはマイナス面ばかりではない。大柄な子とまだ身体ができていない子がボールを奪い合う。どちらが有利かは明らかだろう。だが小さな子もただ負けているわけではない。技術を使って体格のハンデをカバーすることを覚えていく。メンバーが均質でないこと自体が個々の成長を促していく面もある。

この問題に関連して、もうひとつ気になることがあった。それは選抜が適切に行われているのか、ということだ。前述したように、クラブにはジュニア、ジュニアユース、ユースがあり、各段階で厳しいセクションが行われる。クラブの方針や年によっても異なるが、たとえばジュニアユースからそのままユースに上げられる選手は全体の1~2割ということも珍しくない。重要なのは、セクションが、その時点のベストメンバーを選ぶのではなく、将来プロになる可能性の有無に主眼を置いて行われていることだ。コーチたちによると、「2~3回プレイを見ただけで判断するのは非常に難しい」作業だそうだ。すでに身体ができていて運動量もスピードもある中学生は、多少技術に難があっても、試合になれば他を圧倒する。だがそのときは上手いけれどひ弱そうに見えた中学生が、3年後には大きく成長し、運動量やスピードの差もなくなっていた、というケースも枚挙にいとまがない。それでもコーチは選手に対して「諦めたほうがいい」と告げなければいけない瞬間がある。現場では試行錯誤が続いている。

今から10年以上前、当時Jリーグのチームを率いていたフランス人監督に、選手の育成について話を聞くチャンスがあった。そのとき彼が、いちいち「エリートの場合は」「大衆の場合は」と分けて話すのに驚いたものだ。エリートとは将来プロになる者のこと。大衆はサッカーファンのこと。立場が違うのはわかるが、年端もいかない少年をそんなに厳格に分類する必要があるのかと、軽い違和感を覚えたのだ。だが一方、彼は「フランスには世界一になる可能性がある14歳のフォワードがいる」などとも言っていた。現実にならなかった(ティエリー・アンリという、その後フラン

ス代表になる選手のことだった) のを見ると、幼い時期に選抜をし、エリート教育を施すのは、理にかなったことなのかもしれない。日本の諸制度は、そのフランスをお手本にして設計されている。

いずれにせよ選抜が行われれば、脱落していく者が大量に出てくるのは当然である。現実にはプロになれるのはほんの一握りにすぎない。いったんはエリートコースに乗り、将来を囑望された子ほど、脱落したときの挫折感は大きいものがあるだろう。そんな若者の存在は、サッカー先進国のヨーロッパでも社会問題視されることがある。

おわりに

厳しく、ある意味ではギスギスとした世界にも見えるが、そればかりではないことも強調しておきたい。テーマから離れてしまうので紹介できなかったが、クラブはサッカーばかりではなく、ボランティア活動や遊びを通じて、子どもたちの人間的な成長を目指す取り組みも積極的に行なっている。本当の意味で地域の「クラブ」になる芽が育ちつつある。

もう一度、選手名鑑を開いてみると、意外にユニークな経歴が多いことにも気がつく。アルバイ

トをしながら地域のリーグでサッカーを続け、そこでの活躍が認められてプロになった選手がいる。高校在学中に南米に渡って選手となり、逆輸入のような形でJリーグのチームに入る者もいる。そういえば現在スコットランドで活躍している中村俊輔選手にも有名なエピソードがある。中学時代、横浜Mマリノスのジュニアユースに入っていた中村選手は、身体が小さいこともあり、ユースに昇格することはできなかった。そこで神奈川県桐光学園に入り、サッカー部でサッカーを続ける。最初はレギュラーになれなかったが、高校3年になると中心選手として高校選手権で準優勝。卒業後、横浜Mマリノスにプロとして迎えられた。どんなにシステムが整備されても、それだけでプロが自動的に養成されるわけではないだろう。現状ではこうした多様性が、システムを補完しているようにも見える。

なべた・いくお スポーツ誌編集者。主な編集作品に『勝者のエスプリ』（アーセン・ベンゲル著、日本放送出版協会、1997年）など。